

# 世界一周ネットサーフィンでジャック・ロンドンへの旅(No.1)

芳川 敏博(京都府城陽市)

昨年(2007年)秋に日本ジャック・ロンドン協会主催の「第8回」・ロンドンへの旅」に参加させていただき、その時の感動は『呼び声』No.29」にその一端を述べました。ジャック・ロンドンを理解するには、その作品や時代背景、ロンドンの思想や生まれた土地をはじめ旅した地域を知ること、そして何よりもロンドンが関係した所を訪問して実感することが重要であることは言うまでもありません。しかし、ロンドンの現代的意義を検証するためには、現在、世界中でどのようにロンドンの作品が受け入れられているかを知ることと同様に大切なことであると考えます。今日のコミュニケーションの手段の一つであるインターネットを用いて、これから一緒に「世界一周ジャック・ロンドンへの旅」に出かけてみましょう。今回はその第1回目の投稿で、また順次、いろいろ興味深い情報を提供したいと思います。

## 日本一周旅行

まず世界一の「情報検索エンジン」である Google (<http://www.google.co.jp>) を用いて、ジャック・ロンドンに関する基本的な情報を調べてみます。「ジャック・ロンドン」という日本語を完全一致の条件で検索をしますと0.1秒で約25万件が見つかりました。その一位にランクされているのは、インターネット上のフリー百科事典である「ウィキペディア」で、ロンドンの年譜や邦訳作品、関連情報、外部リンクが紹介されています。二位はインターネット上の本屋である「アマゾン」におけるジャック・ロンドンに関する本が75件紹介されています。我が会長の辻井先生の本は24件で実に3分の1を占めています。なお、日本ジャック・ロンドン協会のホームページは第3位にランクインしており、2003年3月1日から現在まで約1万アクセスになっております。ロンドンに関する情報や作品、国内の著・訳書、リンク集を紹介すると共に、協会の読書会やイベント情報があります。意外な情報としては、前日本ジャック・ロンドン協会事務局長であった山崎新瑠氏の「ジャック・ロンドンで知る米国のかたち」というエッセイを第5位に偶然見つけました。そのエッセイで山崎氏は「当時の米国の社会・経済情勢を知るためには、ロンドンの幅広い著作はこの上ない宝庫だと言える」と書かれています。日本語のページの場合、「日本ジャック・ロンドン協会」のホームページを除くと、大半がロンドンの訳書の販売情報で、ロンドンの作品やエッセイはほとんど見られません。我々ロンドンの愛好者や研究者はもっと、情報を一般の人に日本語でも英語でも提供することが必要ではないでしょうか。

## 世界一周旅行の準備編

次に同じ検索エンジンを用いて、「Jack London」という英語を完全一致で調べますと、約0.43秒で1,230万件ヒットしました。日本語と英語を比較すると日本語は英語の約2%にしか過ぎないということが分かります。以前、

インターネットの情報は間違っただ情報が多く、あまりあてに出来ないと言われていましたが、現在ではかなり客観的な膨大な量の情報が存在し、学生がエッセイを書く前に予備情報をインターネットで収集することがアメリカではかなり一般的になってきています。他の情報源と同様にインターネットの限界をよく知った上で、有効に利用する方法を身につけることは、情報化時代を生き抜く私たちにとって大切なことではないでしょうか。ジャック・ロンドンの英語の文字情報1,230万件を全て紹介したり、その傾向を正確に分析することは不可能だと思いますが、日本語の文字情報と比べると、ロンドンの作品やエッセイを一般の人に積極的に提供していると思います。こういうところにも、文化的なコミュニケーションに関する相違が見られます。そのことを証明するようなことを以下で紹介したいと思います。

### 世界一周旅行(アメリカ編1)

英語による特徴的なホームページを紹介します。まず最初に紹介するのは、The Jack London Online Collectionで、アメリカのソノマ州立大学のJean and Charles Schulz Information Centerが主催しているホームページ(<http://london.sonoma.edu/>)です。ジャック・ロンドン研究に関する世界一のインターネット総合サイトであると思います。その特徴として、ジャック・ロンドンに関するあらゆる情報が組織的に統合されており、ホームページ内の検索も一瞬のうちにできます。主な項目は、1)伝記、2)音声情報、3)書簡集、4)家族、5)画像、6)作品集、7)参考文献・エッセイ集、8)学生用の参考情報、9)教員用の参考情報、10)関連学会・ジャーナル、11)リンク集、です。特に、6)作品集は、ジャック・ロンドンの大半の作品が掲載されており、主な作品の場合は、キーワード検索が可能で、その単語が使われている回数や文脈が分かります。例えば、『ジャック・ロンドン自伝的物語』でキーワードを「death」とすると、この小説の中に19回その単語が使われていることが分かります。辻井先生は、この作品のあらゆるところに主人公が死ぬ伏線が隠されていると述べておられますが、このことも一つの証明になると思われる。また、この作品でよく使われている単語トップ10や文脈を調べることができ、それは、1)Martin(769回)、2)know(317回)、3)time(286回)、4)never(257回)、5)life(256回)、6)about(249回)、7)Ruth(241回)、8)eyes(229回)、9)thought(221回)、10)love(217回)です。このような検索(コンコードダンス)の利点は、作品の力点を一瞬のうちに捉え、読む視点やエッセイなどを書く切り口を提供してくれることです。例えば、この場合、内容はMartinとRuthとの愛について、時間的な経過ごとに述べており、目を重視して相手のことを考えている。その結果、人生や生命について深く考えるようになった、というようなことが想像できる。その中から例えば、「目」に焦点をあてて、深く読み、エッセイを書くとユニークな試みになるでしょう。

英文和訳サイト：<http://www.excite.co.jp/world/english/web/>

3万文字までのページが、瞬時にインターネット上で翻訳されます。(次号へ)